

と方法により日本の宗教と社会の構造的性質を探り、歴史の変遷を明らかにする。具体的には、およそ一万年前の縄文時代の宗教世界から現代のオウム真理教などの新新宗教まで取り上げる予定。日本人の自己認識において、日本の宗教と社会に対する理解と認識は不可欠の要素となるだろう。その意味では本講義は、「日本」とは何か、「日本人」、「日本文化」とは何かを反省的にとらえる時の手がかりになるだろう。【「宗教学Ⅱ」・秋学期・後期シラバス】としている。

後期の「宗教学Ⅱ」は、前期で取り上げた宗教学の諸概念や理論や世界宗教史の諸相と関連づけながら、日本の宗教史ないし宗教文化の特質を考察する。その際、授業者として心がけていることは、全体的な枠組みを理解する手掛かりとなる試論・史観を提示することと、関連する視聴覚教材を用いたり、日本の古楽器(石笛、龍笛、法螺貝など)を直接演奏して、リアルな感覚体験を提供することの二点である。わたしの提示する史観は、歴史は直線的に発展ないし変化していくのではなく、螺旋構造的に前代の課題を隔世遺伝的に引き継ぎながら拡大再生産していくという「スパイラル史観」である。例えば、①古代・神話(神祇信仰)の時代、②中世・宗教(仏教)の時代、③近世・学問(儒学・古学)の時代、④近代・科学技術(洋学・西洋教)の時代などの大局的な時代区分や特徴付けをし、古代と近代、中世と現代のスパイラル的共通的重合を指摘する。また我が国の民族宗教である神道の変化を、①神神習合時代、②神仏習合時代、③神仏分離時代、④神仏諸宗共働時代と区分して、時代的変遷とその時代の特徴を捉えやすい仮説的視

点ないし枠組みを提示する。それに関連して、各時代に特徴的な神社の創建を、①古代の出雲大社、②中世の吉田神社・大元宮、③近世の日光東照宮、④近代の靖国神社を例に挙げて、祭神や創建に至る時代的要請を考察する。また、各時代を統合する社会イメージを、①古代の調停的一者、②中世の根源的一者、③近世の仮構的一者、④近代の外向的一者、⑤現代の象徴的一者として提示し、そのような見方の根拠と妥当性を吟味する。さらに各時代の芸能の変遷を、①古代の神楽(神人一体)、②中世の申楽・能(神人複合・半神半人)、③近世の歌舞伎(人間世間)として時代比較する。また本来、神道と仏教が原理的に違っていることを、①神は在るモノ／仏は成る者(在神／成仏)、②神は来るモノ／仏は往く者(来神／往仏)、③神は立つモノ／仏は座る者(立神／座仏)と対照化して示す。以上の諸点が「日本宗教史」を授業する際の工夫である。

パネルの主旨とまとめ

星野英紀

大学教員には二つの大きな仕事がある。教育と研究である。理念的にいえば、両者は車の両輪のごとく不可分の関係にある。しかし、過去においては、大学教員に限れば、実態としては研究が第一で教育は副次的なものだったように思う。しかし高卒のほぼ五〇%が大学進学する現代においては、大学において教育の占める重要度が、かつてと比較して格段に増した。ま

してや宗教教学のように、宗教という誤解の招きやすいテーマを適切に学生に教えることが求められる学領域では、そのための教育技法や教育内容の工夫が大いに必要となってきた。このような主旨で本パネルは開催された。講義にも演習や特殊講義などさまざまな形式と内容があるが、このパネルで想定した講義は、一セメスター一五回講義で、対象は一、二年生向けの一般教養科目であった。つまり宗教を専攻していない学生に日本宗教史をいかに教えるかを念頭においた。

パネラー四名からは各自が、学生に公開しているシラバスが資料として配付された。パネラーの専門領域は、仏教学、キリスト教学、中国学、神道研究を含む日本思想という多彩であったため、シラバスは極めて多様で興味深いものであった。オーディオドックスな編年的な授業展開を核にしながらも、動画や映像を利用するなどをフルに利用する実際の講義形式、身近な事例を積極的に取り入れて学生の関心と呼ぼうとする講義方法、実際に宗教的な伝統楽器をパネラーが実演して見せる例など、さまざまな試みが紹介された。

四人のパネラー発表に続いて、コメンテータから発言がなされた。それはつぎのような諸点にわたった。まず、一つ目としては、講義者の専門研究と、広範な知識が要求される日本宗教史の講義実践との関係についてである。二つ目としては、動画、静止画の使用について各パネラーがいかに考えているか。第三番目としては、オーディオドックスな編年的網羅的な講義方法と、いくつかのテーマに絞っていく講義スタイルとの関係をどのようにミックスしていくか。第四には、学生による授業評価

をどのように扱っているか。

これらについては、それぞれのパネラーから意見がだされたが、映像利用の利用権の問題、身近な宗教的文化遺産ですら知らない学生が少なくない現状を教員が認識すべきであることなどが指摘された。学生評価については、毎回のコメントシートとの併用が大切であるという考え方などが披瀝された。また広範な領域をカバーする日本宗教史では、オムニバスの講義方式もありうるという提案もあった。フロアからもいくつかの意見が出たが、イスラーム圏で日本宗教を教えることの難しさといった意見もでた。総じて、八〇名強の聴衆が集まったフロアは活発かつ和やかな雰囲気にと終始した。それはパネルのテーマが多岐の人びとにとって極めて身近で切実だったからであろう。

日本の大学を通観してみると、日本宗教史という講義は宗教学とともに日本史学専攻・コースでも数多く開講されている。そのため、宗教学による日本宗教史講義の特徴といったことを、宗教学者としては意識する必要があるように思う。さらに、シラバス、動画、静止画などをプールして共同利用するようなデータベースのようなものを日本宗教学会としても考える必要があるかもしれない。

いままでは日本宗教学会学術大会では、研究と教育の関連性、あるいは宗教学教育の実態などについて集中的に論じられたことはなかったように思う。しかし研究第一主義の時代は去ったいま、今後は日本宗教学会としても高等教育における宗教の教え方、宗教学教育について、積極的に論じていくべき時代が来たように思う。